広　場

タシケントのISSA 地域会議に出席して

社会保障研究所　平石長久

1. 東京からタシケントへ

国際社会保障協会（International Social Security Association — ISSA）の第5回アジア・オセアニア地域会議が、ソ連のタシケントで9月24 — 28日に開催され、私は図らずもこの会議に出席する機会を与えられた。

当初、社会保険庁の知人からこの会議に出席し、報告をしてくれと頼まれたとき、私は面喰った。コカコーラとウィスキーしか英語の判らない私よりも、もっとましな人がいるだろうと思い、より適切な人物を探してくれることを期待して、その話をそのままにしておいた。ところが、正式に話が持込まれ、あれよ、あれよと思ううちに、後に引けない破目になってしまった。しかし、平素の悪い癖で、要求されたリポートをジュネーブのISSA本部にやっと発送したのは、すでに期限をすぎてからであった。リポートを送ってからは、後はどうにでもなれと呑気に構えていた。しかし、出発が近づくにつれて、気が重くなった。そのようなときには、「少年の頃から憧れた中央アジアに行けるんだぞ」と思い、気をとりなおしていた。

私がタシケントに行けたのは、ISSAの加盟団体に所属する私に、幸運にも間違って機会を与えられたからである。これは有難いことで、深く感謝すべきである。それにしても、私が自分で行く気になったのは、日本を代表して立派な報告をしようと、殊勝にも意気込んだからではなくて、中央アジアを自分の眼で眺め、足で踏んでみたいという素朴な子供染みた理由だけにすぎない。

羽田に比べると、腹立たしい位に遠くて、不便な所に新空港を造った大いなる愚策を散々罵りながら、私は成田から出発した。乗込んだアエロフロートのSU580便は日本海を一気に飛び、シベリアを西へモスクワに直行した。現地時間の17時30分頃、約10時間で到着したモスクワのシェレメチェヴォ空港には、受入れ側である全ソ連労働組合評議会（全ソ労評）の国際局から、日本語の上手なリコーノフ氏が出向えてくれた。かれの親切な案内と世話で、入国と通貨の申告以外すべてフリーで空港ビルの外に出て、待機していた車で、美しい夕陽を右に眺めながら、モスクワ市内のホテルに向った。

翌朝早く、他の国々の代表やソ連側出席者など約20数人と、バスでドモデドヴォ空港に行き、かなり待たされてから13時すぎに出発して、一路タシケントに向った。タシケントまで大型ジェット機で約4時間の旅である。つまり、東京から約10時間かけて西のモスクワに行き、モスクワから東南に約4時間逆戻りすることになる。小さな灯りが美しく広がるタシケントに着いたのは、現地時間の19時頃で、海抜480mの高原にある都市は、夜の底に沈んでいた。乾燥した高原の澄んだ夜空に、満月近い大きな月が上っていた。空港で下ろされた私達のトランクには、すべてVIPの札がついていた。一行のバスはパトカーに先導され、木立ちの多い市内に入り、カール・マルクス通りにあるホテル・ウズベキスタンに停止した。

今回のISSA地域会議には、日本から9人が参加しており、私達の到着した日の翌日夕方には、日本の7人の参加者が着いて、一同全員が揃った。会議のの参加者はすべて同じホテルに宿泊しており、これらの参加者の中で、私は数人の旧知の人びとや古い知人の知り合いなどに逢い、また、絶えず連絡し合っている人びとにも初めて顔を合せた。中には、どうして知っていたのか判らないが、先方から探して、名乗り出てくれる人びともいた。モスクワから付添ってきたユージンという若い通訳（英語←→ロシア語）とすぐ友達になり、私がかれに敬称抜きで「ユージン（友人）」と大声で呼びかけ、かれは私を名前抜

きで「マイ・フレンド（友人、つまりユージン）」と呼んでいた。

2. ISSAの地域会議

タシケントのISSA地域会議には、オーストラリア（2人）、ビルマ（2人）、フィージー（2人）、インド（5人）、インドネシア（1人）、イラク（2人）、イスラエル（4人）、日本（8人）、韓国（4人）、クェート（1人）、マレーシア（4人）、フィリピン（2人）、スリ・ランカ（2人）、シリア（2人）、ソ連（9人）の計51人の代表が登録されていた。また、アフガニスタン、日本、ヨルダン、パプア・ニュー・ギニア、タイ、および西サモアの6カ国からそれぞれ1人のオブザーブァが参加していた。なお、ILO、WHOなどの国際機関の計4人と、ISSAの会長、事務局長、本部要員の計6人が登録されていた。参加者の人数では、日本はソ連に並ぶ規模であった。しかし、ソ連側からは上記以外にも、裏方の色いろな役割を担当する人びとを含めて、多数の人びとが参加していた。

会議は9月24日午前中の開会式から開始されたが、会議場はホテルからちょっと離れた所にある農業協同組合の近代的なビルで、参加者一同はインツーリストのきれいなバスで、毎日この会場に通った。会議の期間中、3台の観光バスと数台のタクシーが用意されていた。

今回の会議では、(i) 社会保障制度における予防的医療の役割、(ii) 労働災害補償制度の管理・運営における現在の諸問題、(iii) 老齢者の所得保障の発達、(iv) 全国民のより広い部分に対する社会保障保護の拡大、および(v) アジア・オセアニアにおけるISSAの将来の活動という5項目の主題が用意されていた。これらの主題のうち、(i)から(iv)までについて、リポートが各国の報告者から予めISSA本部に提出されていた。

会議は時間まで細かく計画されたスケジュールに従って、予定通りに進められ、初日の午前中には、開会式で3カ国から1人ずつを選出し、議長が委嘱された。その後、ちょっと休憩して、午前の報告が行われたが、初日は午前と午後に前述した主題の(i)が取上げられた。つまり、午前中には、全ソ労評の代表が予防的医療の必要性を強調し、また、午後には、インドの被用者保険公社の代表がインドの経験を報告した。それら午前と午後の報告に対して、報告が終る度に討議が予定されており、日本を含む各国の参加者が意見を述べた。この討議は質疑応答というよりも、むしろ、それぞれが自分の意見を述べるという形であった。このような初日の会議の様子は、テレビ局の取材と思われる人びとにより、ヴィデオに納められた。

2日目は主題の(ii)が取上げられ、午前中には、予め各国から提出されたリポートにもとづき、マレーシアの社会保障公社代表がまとめた各国の労働災害の問題を、同代表が報告した。この報告に用いられたリポートはビルマ、インド、イスラエル、日本、マレーシア、およびフィリピンから提出されており、日本のリポートは労働省労働基準局の藤原氏が作成されたものであった。午後も同一主題が取上げられた。これら午前と午後の報告に対して、前日同様に各国の参加者が色いろな意見を述べ、藤原氏も意見をまとめておられた。

3日目は午前中が主題の(iii)で、ISSA本部のトンプソン氏がアジア・オセアニア各国における老齢給付の最近の動向を中心にしたペーパーを報告した。この報告にも各国の参加者が意見を述べ、日本の大村氏（厚生団）も日本の人口の動向や予測、年金制度の問題などを述べておられた。

実は、前夜の食事の折、トンプソン氏は冗談の相手である旧知の私に、「明日の報告をサポートしてくれ」と頼んだが、平素から毎日を遊びの精神に徹し、3度の食事よりいたずらが大好きな私は、「私は不適切だ。他の人に頼んでくれ」とかれの求めを断わってしまった。かれは「日本代表達はお前が最適だといっている。お前がサポートしてくれないか」と私にねばった。しかし、「私は明日自分の報告で忙がしいんだ」と私がまだ応じなかったので、「それでは」と、かれは日本代表が食事をしていたテーブルでかけ合っていた。私はほんのひとかけらしかない良心の呵責により、翌朝、かれの報告をサポートするために、日本の最近の年金制度を例にメモを用意し、当人の報告直前に、「サポ

ートさせて貰うよ」と告げると、かれは喜んでいた。私のサポートを含めて、午前の部が終ると、かれから「お前のメモをくれ」といわれ、私はそのメモをそのままかれに進呈してしまった。

毎日の例により、昼食後の長い休憩を終えて、午後の部は15時から開始された。午後は主題のIV、つまり、「適用拡大」の問題で、報告者は私とフィリピン社会保障庁代表アロヨ氏の２人であった。私は労災保険と雇用保険の全面適用も含めようと思ったが、結局、健康保険制度と年金制度の２部門だけを取上げて、全国民に適用を拡大した推移をリポートに示しておいた。タイプ用紙15枚に制限されたそのリポートは具合の悪い点、誤解を招きやすい点などを予め除外してあり、また、自画自賛するわけでもなく、要するに、事実の推移を簡単に示しただけのものであった。かなりルーズな私から見ても、そのリポートは学問的にはとくに価値のあるものではなかった。しかし、かつて、ＩＬＯの技術援助要員として、ジュネーブのＩＬＯ本部に社会保障計画部門のエキスパートという名目で登録されていたせいか、私は社会保障制度の導入、適用拡大などについて、なんらかの手がかりをそのリポートに一応含めておいた。

それはともかく、私は出発前にＩＳＳＡの事務局長である旧知のリス氏から、報告の日時と所要時間を予め通知されていた。かれはその連絡で、「皆はすでにリポートを持っているのだから、要点だけを要約し、15分間で報告してくれ」と求めていた。しかし、出発前に他の用事があり、報告のメモを改めて用意する余裕がなかったので、私はタシケントに着いてから、そのメモを書いた。

報告前の昼食時に、リス氏は私のテーブルに来られて、「貴方の報告は半時間ですか」と笑いながら尋ねられたので、私は「いや。お要望通りに15分です」と答えると、かれは「それは大変結構だ」と喜んでおられた。

かつて、戦時中に、中学教師をして「あの男は大胆というのではなくて、図太すぎるのだ」と嘆息せしめた私は腕時計を外して台に置きながら、議長席、各国代表、会議の裏方諸氏などをゆっくり眺めてから報告を開始した。この会議では、英語とロシア語だけが用いられ、ソ連側で用意したスタッフにより、

同時通訳が行われ、急場の設備のせいか、通訳の声が会議場にも洩れていた。私は報告しながら、報告が同時通訳でロシア語に移されるのを聞き、通訳しやすいように区切りに気をつけ、また、時間に配慮していた。報告は約束通りにほぼ15分で終った。その報告のメモは、アロヨ氏の求めに応じて、報告の直後にかれに進呈しておいた。結局、私の手許には何も残らなかった。

アロヨ氏はフィリピンの例で適用拡大の報告をした。かれの報告で、予定されたすべての報告は終り、次の１日を見学に当て、28日の最終討議と閉会式を残すだけになった。

この会議を通じて、各国は社会保障制度の必要性を痛感しているが、制度の採用、適用拡大、実施上の諸問題など各種の問題を抱えていることが感じられた。とくに、途上国の社会保障制度も取扱っている私はそれらがよく判り、この会議は色いろなことを勉強するよい機会であった。それにしても、多くの国には、社会保障から取残された多くの人びとが存在し、また、一部の国では、戦乱に追われて苦しむ人びとがいるのに、事実上はともかく、豊かな経済大国といわれる平和な日本で、身のまわりだけを眺めて、社会保障を論じているのが、空々しくも、また、苛立たしくも感じられる。もっとも、それらは社会保障だけを取扱う人びとの手に負えることではない。また、社会保障は安っぽい人道主義や慈恵的な押しつけがましい親切などで成立するものではないし、論じられるべきものでもない。それにしても、今日の日本の繁栄は、日本の絶ゆみなき努力によるところもさることながら、他の国々の犠牲に負うところがあったのも肝に銘じて、日本の役割にも思いを致すべきである。

3. 高原の都市・タシケント

今回のＩＳＳＡ地域会議は、ＩＳＳＡ本部当局が準備やその他で大変な御苦労をされたことであろう。また、受入れ国のソ連側、とくに全ソ労評とウズベク共和国の当事者達の協力に負うところも、きわめて大きかったのであろう。ソ連側の配慮、準備、手厚いもてなしなどは大変なもので、次回、つまり1982 年

の第6回地域会議を予定されている東京では、今回のソ連側のように手厚い受入れは、とても期待できない。色いろな事情が異なるので、それは致し方ない。

タシケントは新興の工業都市で、また、1966年の壊滅的な地震後に再建された計画的な大都市であるが、とにかく緑が多く、美しい都市である。人口150万人以上で、ソ連第4位のこの都市は、ホテルの13階にある部屋のヴェランダからの眺望では、濃い緑がすぐ下から一面に広がり、その間にビルがあちこちに見えた。それらのビルの1つには、国際児童年のシンボル・マークが、壁一面に大きく画かれていた。このように緑が多いのは、木立ちの深い公園や辻公園があちこちに沢山あり、枝を広げた街路樹が繁っているからで、この都市では、1年間に数十万本の木や草花を植えているそうだ。9月下旬というのに、あちこちの公園や通りなどに、草花が咲きこぼれていた。東の天山山脈（正確には、天山山脈に連なる山脈）を水源地にするオアシスで知られてきたとはいっても、この土地は乾燥地帯で、天山山脈からの豊かな水を利用して、街路樹や草花に水を供給している。たとえば、街路樹などにも、時間的に給水する噴水が設けられている。また、豊富な水を利用して、市内に水量の豊かな小規模の運河が流れ、人造湖も出来ている。なお、天山山脈から注ぐ川は、タシケントの西で、同じ天山山脈に端を発し、キルギス共和国を流れる川と合流して、カザフ共和国を北西に流れ出るシル河になる。このシル河は、帰路に機上から眺めた海のように広がるアラル海に注いでいる。

タシケントは中国北西部にあるシルクロードで有名な新疆ウィグル自治区の北西部、つまり、広漠たるタクラマカン砂漠の広がるタリム盆地の北に峨々として峻える天山山脈が、国境を越えてソ連領のキルギス共和国から西に延び、その山脈の西が切れて高原の広がる所に位置しており、タシケントの西には、キジル砂漠が茫洋たる大海原のように、アラル海まで広がっている。タシケントは古くから水の豊富なオアシスとしてよく知られ、南西のサマルカンドなどとともに、2,000年以上の歴史的な記録を誇り、四方への交通の要衝として古くから栄えてきた。交通の要衝としての重要な役割は今日でも変らず、現在では、かつての駱駝や馬の役割を、ソ連および各国の航空機が果している。

かつて、少年の頃、私はいわゆるシルクロードを通じて、古い時代から東西交流の壮大な絵巻物を繰広げてきた中央アジアを、いつか必ず訪ねてやろうと考えていた。そして、戦争末期近いとき、私は何の未練もなく祖国と肉親を捨て、宵暗が次第に濃くなる北京から、数人の人びとに見送られて、単身で中国奥地に向った。目的地は一応蒙古高原と称していたが、本当は遥か西のかなたにある現在の新疆ウィグル自治区で、戦場を避けるために、蒙古の奥を大回りする迂回を秘かに計画した。しかし、不運にも、この旅は失敗した。タシケントはその新疆ウィグル自治区の西にある。

タシケントのホテルで、東向きの私の部屋は美しく荘厳な夜明けの眺望に恵まれ、遠くに見える山から毎朝陽が昇ってきた。その山々の遥かかなたに、私がかつて訪ねようとした天山山脈の連なる新疆ウィグル自治区がある。後日、タシケントを離れ、モスクワに向うとき、空港を舞上がったジェット機から、それらの山々のかなた遠くまで、キルギス共和国に天山山脈へ続く山々が重畳と連なり、中には、雪を頂いているのを遠望することができた。それはともかく、会議の期間中に、私は毎日ホテルの部屋についているヴェランダから遠くの山々を、望郷の想いのような心境で眺め、あたかもコップの中で暮すように窮屈な祖国とわずらわしい家族を、再びさらりと捨てて、その山々を越えたい思いに駆られていた。私は生来の呑気な放浪児で、日本の伝統的ないわゆる農耕民族文化のうっとうしい柵の中に生きるよりも、騎馬遊牧民族のきびしい世界で暮すのが適しているのだろう。

タシケントでは、東や西の様々な顔を見かける。それはこの土地が古くから、また今日でも交通の要衝であったことを示しているのだろう。しかし、この地方の人びとは主としてウズベク人である。ウズベク人はウィグル、キルギスなどとともに、広大な中央アジア高原を支配してきたいわゆる騎馬遊牧民族であった。また、トルキスタンは、かつて西に移動し、今日のトルコ共和国を形成するトルコ人の故郷である。それはともかく、タシケントは古来交通の要衝で

あったせいであろうが、「タシケント精神」という言葉がある。この言葉は平和、友情、相互理解を各国民が求めることを意味しており、ここで開かれたアジア・アフリカ諸国作家会議以後、日本でも見かけた。

4. 騎馬遊牧民族の末裔

騎馬遊牧民族は農耕民族と思考や生活などで、異なる点が多い。たとえば、農耕に生きる後者は、雨が降らなければ、土地を離れられないので、「雨乞い」をして雨を待つ。しかし、「雨が降らなければ、雨の降った所に行け」という言葉をもつ前者は、草がなくなれば、土地を捨て、家蓄を連れて草のある土地に移動する。時には、他人の領域に移ることもあり、事と次第では、実力を行使しても草の生えた土地に移り、家蓄を守る。かれらの生活では、果報は寝て待つものではなかったのである。遊牧というのは草原に家蓄を追いながらのんびり遊び暮すのではなくて、きびしい自然と戦い、激しい労働を伴ない、そして時には、他の遊牧民達と血を流し合う生活であったのである。強くなければ生きられない騎馬遊牧民族は、誇り高い自由人で、かれらのきびしい生き方には、私達の周辺でよく見かけるいわゆる「甘え」などの育つ余地はなかったのである。

また、農耕民族は自分の耕地のことを考えればよいが、騎馬遊牧民族は家蓄を襲う野獣などが現われると、他人の家蓄でも守るために、起ち上がらなければならなかった。そして、土地を離れられない農耕民族は、いわゆる土地に密着した下らない身分制度の中で生きてきたのに、騎馬遊牧民族は身分制度などにとらわれないで、大草原に生きる自由人であった。したがって、後者には、「肥えた飼犬より、やせた狼の方がましだ」という言葉が生れたのである。

タシケントの道路は広く、路面電車、トローリーバス、そしてバスがその道路に共存し、市民の足の役割を果している。また、道路の下には、地下鉄が走り、地下鉄のプラットホームは大して広くも、また長くもないが、照明が立派で、私達が案内された駅のプラットホームは、可憐な鈴蘭の花を束ねたように豪華な美しいシャンデリアの明るい照明で飾られていた。道路には、車が比較的に少なく、広い道路は更に広く見えた。それにしても、馬や駱駝を捨てた騎馬遊牧民族の末裔達は、今日では自動車や電車を利用しているのである。

通りや広場の然るべき場所では、大勢の人びとを見かけた。また、休日には、公園、広場、通りなどで幸せそうな家族連れの姿も多く見うけた。騎馬遊牧の時代では、騎馬遊牧を離れた者は、土にすがって農業で生きるしかなかったが、農業に生きるのは弱者のすることであるとされた。したがって、騎馬遊牧を離れた者は、哀れになるといわれたものである。現在、タシケントでは、騎馬遊牧を離れた人びとが、どのような職業で暮しているのか知らないが、哀れどころかむしろ幸せそうに見えた。

通り、広場、公園などで見かける人びとは、服装もこざっぱりして、むしろ、立派であるといえる。約５０年前に被り物の黒いチャドルを脱ぎ捨てた女性は、近代的な服装で颯爽と通りを歩いている。しかし、民族特有の美しい模様の衣裳を上に羽織っている女性も多い。男性は古い民族衣裳を洋服に変えているが、民族特有の刺繍のついた四角い帽子を頭にのせている姿をよく見かける。一見したところでは、通りや広場で見かける人びとから、草原を颯爽と馬で駆けていた勇壮な騎馬遊牧民族の姿を連想することは、きわめて困難である。しかし、長い歴史を重ねて育ってきた騎馬遊牧民族の思考や生き方などは、今日でもどこかに残っているのであろう。

その一端を手厚いもてなしにも垣間見たように感じる。会議の終った後、毎晩なんらかの催し物に招かれ、いつも良い席が用意されていた。また、若者や子供達の民族音楽と舞踊の招待では、出演者一同が入口から建物の中にまで整列して、音楽と拍手で参加者一同を歓迎し、催しの合間には、子供達が参加者全員に花を手渡してくれた。楽しかったこの催しの終了後、出演した可愛らしい子供達が、母親達に連れられて家路を急ぎ、街灯と木立ちの通りに次々に消えて行った。

ホテルの夕食は毎夜22時頃であったが、天井が高く、広いレストランには、

会議関係者の席が一段高い所に特別に用意され、ウズベク共和国の受入れ関係者数人が、全員の食事が終るまでいつもその入口で参加者一同の世話に気を配っていた。元来モンゴル民族を含めて、騎馬遊牧民族は他所者に親切にするが、その伝統は今日の人びとにも残っているのであろう。自分達は食事を後にして、遠来の客人の食事に気を配るのも、その一例といえるであろう。ちなみに、騎馬遊牧民族では、他所者に親切にすると同時に、自分が旅に出たときには、他所で親切にもてなされることになる。それは騎馬で遠くへ旅をする機会のあったかれらの祖先からの伝統的な風習であり、そして他所者に親切を施すのは騎馬遊牧民族のいわば「仁義」であったのである。

それを知っている私は、この土地の人びとが日本を訪づれたときに、私達がかれらのもてなしに匹敵するか、もしくは、それ以上のもてなしを提供できると期待できないので、色いろな手厚いもてなしを手放しで嬉しがっておれない気もした。しかし、余計なことを考えないで、もてなしは素直に有難く享受させて頂いた。

食事は私が旅に出て最も楽しみにしている1つで、私は多種多様で美味しいといわれるウズベクの民族料理にも期待していた。期待は外れず、各国の代表達と一緒に、3度の食事を毎日楽しませて頂いた。よく冷えたヨーグルトは快く舌を転び、喉を流れるので、大き目のコップで毎度楽しんだ。特有のパンはこねた小麦粉を円くして焼いた例のチャパティと同一で、直径が15cm位、厚さが2cm近くもあり、焼きたての温いのはとくに美味しい。このパンに中国の焼餅を連想した。料理も美味しく、とくに昼食に現われた肉や野菜などの入っているスープは、殊の外に美味しかった。勤め先の近所で、昼食時に、これと同じ料理を出してくれる店があれば、借金しても通いたいと思う程である。ちなみに、かつて、勤め先の近くにあった何とか共済会館では、ロシア・スープを出していたので、子供の頃の郷愁に誘われて、昼食時に時折試みたが、そのスープは旧満鉄の列車食堂にすら及ばなかったような気がした。タシケントで味わったスープでは、到底比較にならない。

ところで、会議の期間中、昼食は会議場のあった農協ビル2階の近代的なレストランで用意されていたが、1日のうち昼食に最も御馳走が現われたような気がする。テーブルの皿に生野菜に丸ごと添えられていたトマトは、真赤によく熟れて、皮が昔のトマトのようにやや固く、トマトの味と匂いがするので、なつかしくなった。このトマトはトマトがナス科に属しているのをはっきり示して、ナスビそのものの形をしており、トマトの発生、伝来などの歴史を物語っている。

3度の食事によく現われた西瓜や瓜も美味しく、いわば歴史的な遺産である。包丁を入れる前の形は、かつて中国でよく見たように、横に長い。また、食事にはいつも高脚の大皿に姿を見せた何種類かの葡萄も珍味で、この味はとくに忘られない。これも原産地の中央アジアから遠く東に運ばれ、日本にも伝来している。かつて、中国の古人は「葡萄の美酒、夜光の杯、飲まんと欲し、琵琶馬上に催す云々」と詠ったが、これらはかつて中国でいわゆるハイカラ属の珍重した西域からの伝来物を、詩に詠み込んである。当時の中国のハイカラ属が珍重する以前から、これらの物は中央アジアの庶民の物であった。しかも、中央アジアには、中国の王侯が涎延おく能わざる物として憧れた例の汗血馬もいたのである。タシケントでは、美味しい葡萄やワインを楽しむことはできたが、汗血馬は遂に見参することができなかった。ある夜招待されたサーカスで、狭い場内を勇壮に疾駆していた馬が、あるいは汗血馬だったのであろうか。